

sweet birthday.

おりくらはじめ@CANDYFORCE

街を歩いて近づいてくる様子を一切見せず、入口の自動ドアが開きかけた瞬間になつて硝子の向こう側にいきなり姿を現したその男が、その店、つまり『バイナリィ・ポット』の店内に入ってきた時に、

「いらつしやいませ！」

最初に元気な声を上げたのは、『小津』と書かれたネームプレートを胸に付けた、例の衣装のウェイトレスだった。

「や、こんにちは」

気さくに挨拶する男に、周囲の客が胡散臭げな視線を一瞬向け、すぐに銘々のディスプレイへ視線を戻す。

「あー……」

他人の視線のことなどまるで気にする風でもなく、男は店内をぐるりと見回す。

コーヒーカウンタは……無人。

「羽根井さんはおられますかね」

「羽根井、さんと仰いますと……」

束の間、何か考え込む仕草のウェイトレス。

「あの、羽根井さんというのは、ひよつとして芦原さんの」

「こら千歳ちゃん。従業員の個人情報をはいはい喋っちゃダメだよ」

その後ろに突如現れたスーツ姿の女性が、ちよん、とウェイトレスの肩を小突いた。

「ことであつてうわひやああつ！」

そのまま、飛び退つたウェイトレスの前にすつと出て、

「いらつしやいませお客様」

綺麗に一礼してみせる。

「お探しの『羽根井』は現在当店には在籍していませんが、代わりまして私、『芦原』がお伺いいたします」

胸のネームプレートは『芦原』だし、あのすごいウェイトレスのコスチューム姿でもないが、しかし彼女は確かに、男が探していた『羽根井さん』に相違ない。

「……なるほど。そうかそうか。顔を出さなかった一年の間に、そんなことになっていたワケですか。……そうか、とうとう彼も年貢を納めたのか」

「もうみんな知ってることですよ。お客様の場合は、毎年一回しかいらつしやらない、つていうことの方を何とかしてください」

「あは。いやごめんごめん、こつちもこれで忙しくてさ」

ジト目で睨まれて、男は照れたように頭を掻く。

「いやいや、知ってたらお祝いに何か手土産くらい持ってきたんだけどさ。ああそうだ、アップルパイは好きかい？」

「ナンパは他所でなさってください」

ダメ押しとばかりにひらひら左手を振って……つまり、葉指の根元で控え目な輝きを放つその存在をアピールしつつ、

「それはさておき、アップルパイは好きですけどね」

ついでのようにそう付け加えてにっと笑った。

「今年も、いつものセットを二組でよろしいですか？」

「それをお願いします。それと、今ここで飲むコーヒーを一杯」

「畏まりました。それでは準備いたしますので、お席の方で暫くお待ちください」

「よろしくねー」

どうやら会話は終わったようだ。

わけもわからず成り行きを見守るウェイトレスの前を離れて、女

性は真つ直ぐコーヒーカウンタに向かい、男は手近な席に陣取る。

「……優希さん、優希さん」

コーヒーカウンタで何やらあれこれ豆を選別し始めた女性のスーツの裾を、ウェイトレスの指がちよいちよいと引つ張った。

「んー？」

女性はあるが、豆から目は離さない。

「あのお客さん、お知り合いですか？」

「んー……まあ何ていうか、知ってるような、知らないような」

「何ですかそれ？」

「あのね。わたしとかよーいちが時々行くバーのマスター。で、毎年十一月になると、その時のお薦めのコーヒー豆を買いに来るお客様、でもあるの。だけどそれだから、詳しくは何も……別に、名前知ってるとか、友達だとか、そういうのじゃないんだ」

「……ああ、それで」

何か得心がいったように千歳が頷く。

「何が？」

「あのお客さん、全然PC使ってくれないんです」

「そういうお客さん、近頃は時々いるじゃない」

バイナリイ・ポットは元来ネットカフェだが、コーヒーを飲みに来るだけの客も最近は大分増えた。

どちらかといえば、前面に『ネットカフェ』色を押し出しているのは『二号店』の方で、それに対して『一号店』と呼ばれるようになった旧店舗、つまりこの店を預かる女性は、『普通の喫茶店（か

なりの席数がネットカフェ兼用)』くらしいのところを狙っているよ
うだ。

「そうですけど」

ウエイトレスは微妙に唇を尖らせる。

「いいんですけど、でもせっかく丹精してるPCなんですから、一
号店の技術担当としては、できれば皆さんに使っていただきたいで
す」

「あはは。まあ確かに、千歳ちゃんとしてはそうだよな」

こちらはこちらで、思惑も言い分も色々であるようであった。

「さて。そろそろ準備できるから、お客さんレジに呼んでくれ
る？」

とん、とカウンタ―に置かれたのは、包みがふたつと、二つ折りの
メモ書きだ。

「会計はわたしがやるから、そのままカップ下げてきて」

「はい」



西部劇に出てくるようなドアを押し開いて、

「あー、ごめんねーお客さん、まだ昼休みー」

その男が『りんご亭』の店内に入ると、すかさず、奥の女性がそ
う声を上げた。

ここの流儀に合う時計に持ち合わせはないが、どうやらここは
今、昼とも夕方ともつかない、中途半端な頃合いであるらしい。

「ああいやいや。取りに来ただけですから」

苦笑混じりにそう言われて、

「へ? ……ああ、りんごの! はいはい、今出すから待つ
て」

女性はようやく、男が誰だったのかを思い出したようだ。

「それなんですけどレイチエルさん。今日の分は今日の分として、
後でもうひとつ焼いてもらえませんか」

厨房からバスケットをひとつ引つ張り出し、それを抱えて奥から
歩み寄ってきた女性は、

「え? ええ、そりやもちろん構わないけど、でもそれ、今すぐ出
すのはちよつと無理よ?」

そこまで言つて、訝しげに首を傾げる。

「ええ。そうですね、また二日後くらいに取り寄りますから」

「…:前から気になってたんだけどさ、あんた一体、どつからコ
レ取りに来てるの?」

男はいつも…:有り体に言えば、奇妙な格好をしている。

靴。
白のシャツ、蝶タイ、限りなく黒に近い濃紺のスラックス、革

男の世界においてはごく普通の出で立ちなのだが、シンフォニア、
と呼び慣わされるこの世界では、『普通の格好』といえどもつ
とぎつくりした、悪くいえばいい加減な服装のことだ。

「もしかして貴族とかの類?」

「やだなあ。僕がそんな高貴な御身分に見えます?」

「見えないから訊いてるんじゃないの」

相変わらず、客に対して無遠慮な口を利く看板娘である。

まだ『娘』でいいのか、などとうっかり口走ろうものなら、フラ

イパンで力一杯ぶん殴られかねない年齢……の筈、であるが。

「……ちよつと。今、何か失礼なこと考えなかつた？」

それはさておき、勘の鋭さも相変わらずであつた。

「何も？」

「本当に？」

いやむしろ磨きが掛かっているかも知れない。

「まあいいわ。ね、たまにはあんたも普通に遊びに来てよ。うちの自慢の歌姫も最近ちよくちよく店に出てるしよ。確かあんたも酒場やつてるんだつたわよね？ そういう話もちよつと聞きたいわ」

「歌姫って、確か今は王妃様だつたんじゃ？」

「そうよ？ 王様のお妃にして、りんご亭の歌姫。ちなみに、お供に付いてきてリユート弾くのがその王様。……変な国よね、ふふつ」

おかしように女性が笑う。

そんなことを笑つて話せるのだから、取り敢えず、クリフ王の御世は落ちついたものである、ということなのだろう。

「世の中の王様とか貴族とかがみんなあだつたら、あたしも別に嫌いになつたりしないのにな」

しみじみと呟く。

「ま、いいわ。はい」

次には、明るくそう言つて、抱えたバスケットを差し出す。

「ありがとうございます。では、お代は例の」

「例の黒い粉ね。何だつて、コー……えー、何とかいう」

代わりに渡されたのは、『バイナリイ・ポット』で芦原店長から受け取つたコーヒー豆。ふたつあつた包みの片方だ。

「そう、コレさ、ある時は店で出したりもするんだけど、なんか一

部の物好きが結構食い付いててね。どうやって作つてるのか、よかつたら今度教えてくれると嬉しいんだけど」

教えたら作れるようなものなのだろうか。

……難しいことは考えないことにして、

「なら今度、作つた本人に都合を訊いておきますよ。それじゃ

軽く手を振つて、男は『りんご亭』を辞する。

押し開けられたウエスタンドアが閉じて、

「本当にさー、たまには普通に来てよー！」

次の瞬間には、男の存在の痕跡は女性の視界から掻き消えていた。



そのバーにふたつかしかないテーブル席の片方には、幾つかの物品が並べられていた。

「で、あとは……そうだな、今年は多分、珠津島銘菓・さゝきの金鏢あたりが直接届いて、つてところじゃないかな」

何やら遠くの喫茶店で買つてきたというコーヒー豆と銘柄のメモ。

出所まつたく不明、原料も製法も悉く不明……最早『謎の』としか言いようのない、広義でいえばアップルパイなのであろう何か。

「ほとんど甘いものじゃないの。毎度毎度何の陰謀よコレ？」
文字通りのお誕生日席に陣取つた、このささやかなパーティーの主

賓が、実にわざとらしく、響めつらしい顔を作ってダメ出しなど始め、

「とか何とか言いながら、顔がにやけてますよ恭子？」

そこに横から結が突っ込みを入れて、

「ふふっ」

さやかとカレンがくすくす笑う。

不思議なことに、このバー以外では会わない……どころか、話せば話すほど『同じ世界に住んでいない』としか思えない四人だが、まあそれはそれとして、呑み友達になつて随分経つ四人でもあつた。

「お煎餅の方がよかったですか？」

「そうね、お煎餅『も』あればベストって感じかしら」

「流石は恭子さんです」

「ちよつとカレンさん、『流石』って何よ『流石』って」

「いえ、ここは私たちもお煎餅にするべきであつたかと」

アップルパイのバスケットの横に、どん、と塩が置かれる。

ワインのボトルより少し背が小さいくらいの、洒落た塩が二本。

「ごめんさいね、お煎餅じゃなくて。こちらは私とカレンから、

今年に月麦のお酒と、それからムーングレープのお酒ですね」

月王国史上初、地球人の夫を王宮に迎えた嵐の女王フィーナが、

父母の世代から、王冠と、『嵐の女王』の二つ名を継いで数年。

平穏極まる嵐の時代は今もなお続いている。

「最近ようやく、地球でも手に入りやすくなってきました」

女王二代の悲願であつた月・地球間の国交正常化、交流活性化に向けた歩みは、決して早くはないものの、着実な前進を続けている。

例えば今日、月から届いた塩が恭子の前に二本並ぶことだって、その成果の中にあることなのだ。

「つたぐどいつもこいつも、自分が呑みたいだけじゃないの」

大体いつもの要領で恭子はぶーたれてみせるものの、

「顔が緩み切つてる人が言つても説得力ないですよ恭子？」

「……う」

なにしろ本当は本当に喜んでるものだから、実にまったく迫力に欠ける点は否めなかつた。

「はいどうぞ。ちなみに、これはそんなに甘くはないですよ」

四人の誰にも見覚えのなかつたウェイトレスが奥からやってきて、何か注がれたカクテルグラスをそれぞれの前に置いていく。

「あら、新しい人？」

「ええ。実は最近ちよつと、すごく高いところにあつた自分のお

店ごと墜落しちゃったんですが」

「……墜落？」

いきなり話が物騒になつた。

「路頭に迷つていたところで、ここマスターに拾われまして。私

も酒場をやつていたものですから、そのままお世話になることに」

物騒なことを愉快そうに話して、ウェイトレスは笑う。

「いや、墜落が云々のところは笑い話じゃないよな」

「怪我とかなさらなかったんですか？」

「どうなんでしょう。まあ、こうして生きてるんですから、生きてるんだとは思いますが」

次には、本当にわからないことを考えるように首を捻る。

私はこれでいいとして、ノーヴアス・アイテルは……唇の内側でだけ続けられた言葉は、結局、誰の耳にも届かずに消えてしまふ。

「……あの」

「あ、申し遅れました。メルトと申します。メルト・ログティエ。このお店共々、私のこともどうぞご鼻屑に」

再び、メルトと名乗ったウエイトレスが微笑んだ。

「それでそのお酒、私と一緒に落ちてきた、私のお店の在庫だったものなんです。あちらでは『火酒』って呼ばれていたんですけど、このあたりで『火酒』っていったら、別のお酒のことを指すんですね」

日本語の話としては、狭義でいうとウイスキーが『火酒』。

あとは、ウオツカやブランデー、焼酎といったアルコール分の多い酒が、『火を点けると燃える』ために『火酒』と呼ばれるらしい。

「でも、いいんですかメルトさん？ そんな貴重品を私たちに」

流石にさやかが申し訳なさそうな顔をするが、

「構いません。それは、もうない筈のものです」

相変わらずの柔和な笑みを浮かべて、メルトはそう答える。

「ですから、よろしかったら皆さんで呑んじゃってください。私と、私の国からの、お誕生日のプレゼントだと思って」

小振りの甕のような粗末な容器がひとつ、またテーブルに並んだ。

「で、今年もいつもの持つてきたんだけど、もう載り切らないな」
メルトと入れ替わりでやってきたマスターは、左手の上に何かの皿を載せたまま、テーブルの前で思案に暮れている。

「いつものって……まさか、また？」

そこにあるのは多分、綺麗なデコレーションケーキ、なのだろう。

……：ケーキを台にして剣山でも作るかのような勢いで、表面が埋まるほど突き立てられた数々の蝋燭さえ取り除けば、だが。

「一応あれから毎年一本増やしてはいたんだけど、もう正確なローソクの数とかさっぱりわからなくてさ。ごめんね調査不足で」

「悪いと思ってるなら毎年毎年出すんじゃないの」

「今年こそ火い点けてみる？」

「火災報知機が鳴っちゃうーってんでしょ？ 年増で悪かったわね」

恭子は無然と口を尖らせる。

「わかるわよ。マスターが毎年そうやって笑わそうとしてくれるの。本当さ、私んところからだって、何か持って来れたらなってるけど」

……：口を衝いたのは、年増が云々、とは違う悩みであった。

「ようやくマルバスは根絶できたけど、社会も産業もほぼ壊滅。生き残った人の生活再建はまだまだこれから。なのに、こんなにさ……：私たちがばかり、いつだってもらうばかりじゃない」

「恭子……」

「だから、ですよ」

さやかが人差し指を立てる。

「苦しい状況だったら尚更、笑えるひとは笑っていないと。ひとを元気にするひとが、まず真つ先に元気にならないと。……『復興』つてきつと、そういう順番で始まっていくものですよ」

「あ……ごめん、何かしんみりしちゃった」
照れたように恭子が笑う。

そこへ、
「着いたぞ。待たせたな皆の者」

店のドアが開いて、振袖姿の女性がふたり入ってきた。

「お、来たね伽耶様」

「……なあ、店主。『様付けで呼べ』と言ったのは確かにあたしだが、何だ、もうそれはよいことにせんか？　こそばゆくていかに」

「勝手極まる言い草ね、か・や・さ・ま？」
背の高い女性が唇を歪める。

「桐葉、貴様なあ……」

「まあまあ伽耶様。はい皆さん、わたしたちから」

ふたりに続いて入ってきた……『伽耶様』よりは背の高い、だが世間では充分に小柄で通用するであろう女性が、四角い包みを卓上の隙間に立て掛ける。

「珠津島銘菓、さゝきの金罌です。皆さんで召し上がってください」

「……本当に甘いものばかりじゃないの」

「えへへ。すみません」

特に悪びれた風でもなく、女性はぺこりと頭を下げる。

「ま、いいわ。……本当もうさ、こんな年増で誕生日なんて、今更めでたくも何ッともないけどさ」

三人分、例の『火酒』が注がれたグラスをメルトが差し出す。
「せっかく来てくれたみんなに免じて、『今日はめでたい』つてことにしといてあげるから」

グラスが全員に行き渡つたのを見計らつて、やや自棄気味に、恭子が声を張り上げた。

「あんたたち、責任とつてちゃんと呑みなさいよ！　はい乾杯っ！」

全員分の『乾杯』の声が続いて、笑いざざめく声と、銘々に手を鳴らす音が、狭い店内を騒々しく満ちた。